

七北田川 “新干潟システムの形成” の模索

■概要

2011年夏、七北田川河口は閉塞した。このことで、河口南部の砂浜と、北部の蒲生干潟を形成していた砂堆がつながった。その後の台風(9月21日)による増水と波浪により、砂堆の一部が決壊し、七北川はかつての干潟を流路に変え、流口を北に移動した(Fig.2)。

この河口はその後も閉塞することなく存在し、今回の調査では海側に沿岸三角州が発達するなど、新たな“七北田川干潟システム”が形成されつつある。河口に発達した砂州により、蛇行を繰り返しているように見える。

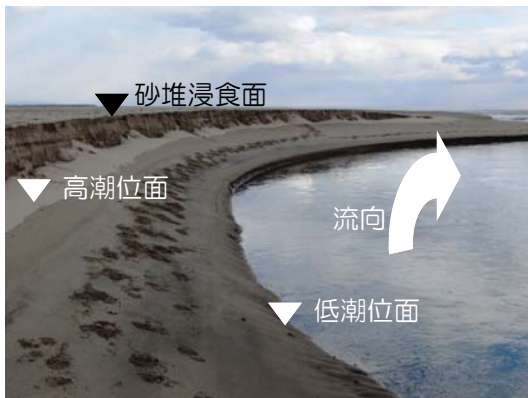


Fig.1 新河口付近
(2011年1月12日；干潮時撮影)

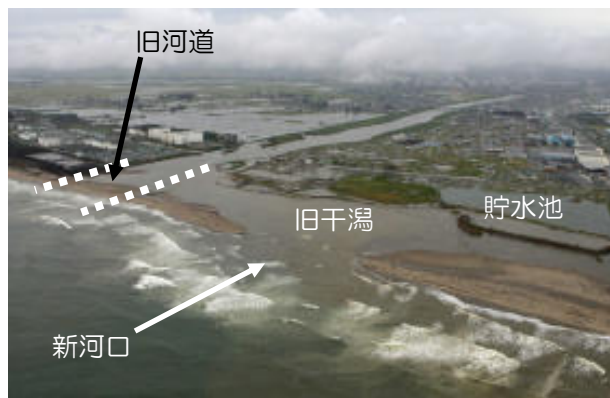


Fig.2 新河口の空中写真
(2010年9月22日；河北新報社)

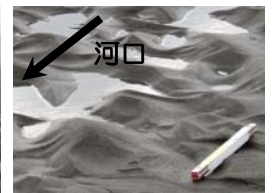


Fig.3 旧干潟に堆積した潮汐デルタ上の舌状リップル。大潮の下げ潮により形成された。海水の出入りは活発である。



Fig.4 汀線より陸側の潮汐デルタは、潮汐平底と癒合し、面積を広げ新たな河口干潟を形成している。

■まとめ

蒲生干潟は、七北田川の流路を人為的にかえることで形成されたものである。今回、七北田川が河口として選択した流路は、かつての河道と、津波による、旧砂堆の浸食部である可能性が高い。現在の七北田川の姿は、地震による地盤沈下に伴う相対的海水準上昇に対し、人工の河口を棄て、より安定な河道を選択している途上といえる。旧河道を活用し、大きく蛇行した河口は、河口干潟を形成して、新たな干潟環境を形成している。

閉塞した河口を掘削し、3.11津波以前の河口に戻す計画もあるようだが、七北田川が自ら安定な姿を模索している現状を見守ることも大切ではないかと考える。(西城光洋)